

なるように検出された。建物跡の周辺からは遺物が出ていないため明確な年代は提示できない。

近世・近代

1区からは近世・近代の溝状遺構を検出している。近代のものは、遺跡発掘前に建っていた住宅に付設されていたものであろう。

まとめ

今回の調査では、弥生時代の河川跡と、平安時代後半から鎌倉時代にかけての集落跡が確認された。

令和2年度の調査では、軒瓦や多くの輸入陶磁器類が確認されるなど、近隣に所在する法勲寺に関係した有力者が座した集落を想定できる結果が得られた。しかし、本年度の調査では、有力者が座した集落を想定できるような結果ではない。遺構の南方と西方で検出した溝群であったり河川跡などが原因となり集落の拡張がされなかった可能性も想定できるが、いずれも推測の域をでない。



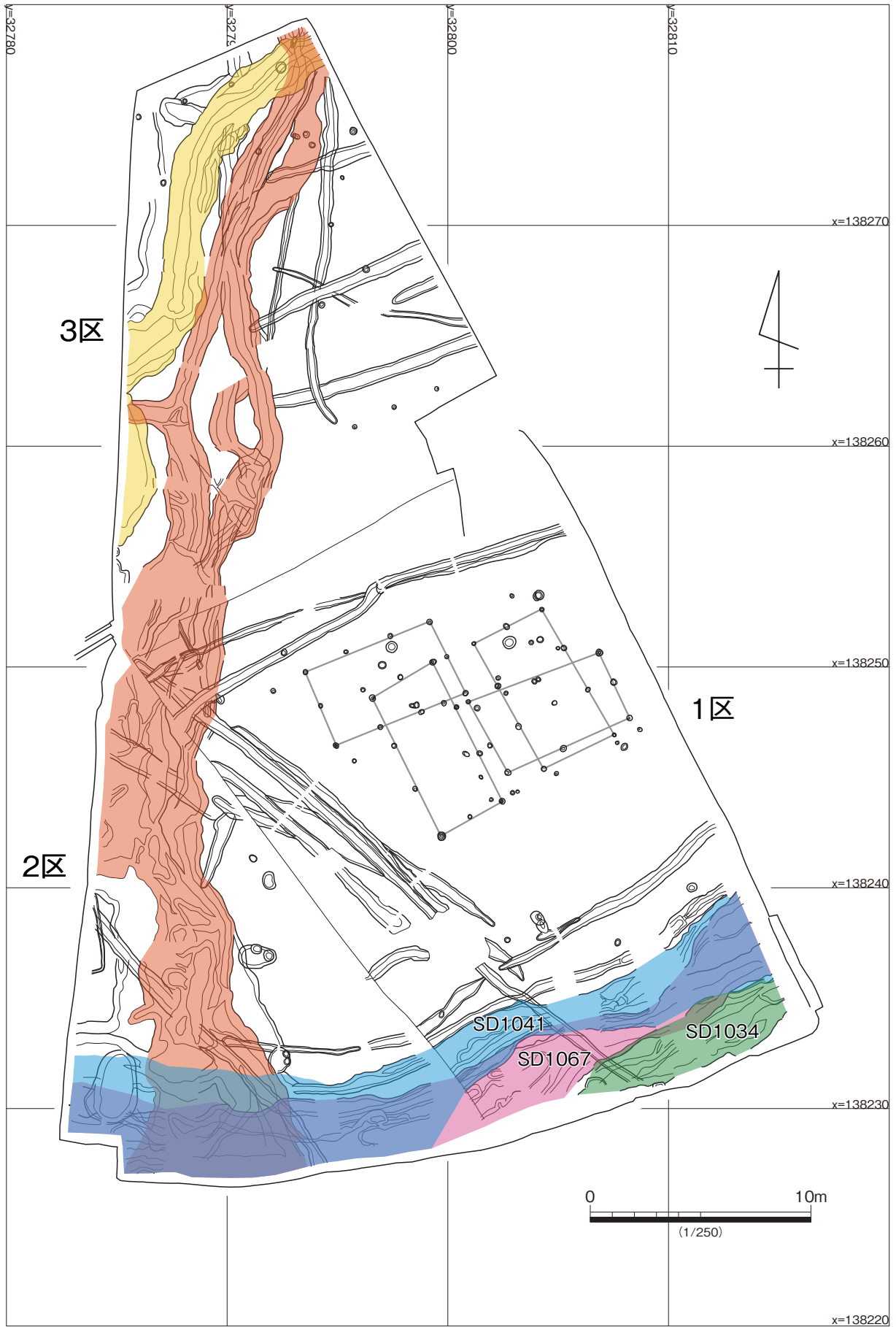
写真 24 弥生時代の河川跡完掘（南から）



写真 25 中世の建物跡検出（北から）



写真 26 2区南部溝群完掘（東から）



第 15 図 遺構平面図 (1/250)

おうみなかむら
青海中村遺跡

青海中村遺跡は坂出市青海町に所在する遺跡である。周囲の地形をみると、北に北峰、南に五色台が聳え立ち、その中央を青海川が西に向かって流れている。青海中村遺跡は、この青海川によって開かれた谷底低地上に立地する。

遺跡の周囲を見渡すと、中世の経塚とされる中村経塚が北にあり、古墳時代後期の横穴式石室を有する中村古墳が北方の丘陵上に築かれているほか、東方約600 mには14世紀から15世紀前半にかけての集落跡が確認された青海神社下遺跡がある。また、近世以前は遺跡の西方約1 km付近まで海が湾入しており、弥生時代後期の製塩遺跡である高屋遺跡や古墳時代前期の積石塚をもつスベリ山古墳群、古墳時代後期の初期横穴式石室を有する雄山古墳群が広がるほか、古代には松山津が付近に存在したと推定されている。このように、遺跡の西方では海を活かした生業や交易が古来より行われ、これらを統括する政治権力も出現していたと考えられる。



第16図 遺跡位置図 (1/25,000)

遺構面は1面で、基本層序は、第1層：表土、第2層：県道造成時の花崗土、第3層：遺構面、第4層：ベース層の大きく4層に分かれる。県道造成時に激しい攪乱を受けており、県道造成時の花崗土直下に遺構面が広がるが、場所によっては攪乱を免れ、造成前の層序が残っている調査区もあった。3区南壁では、①表土②県道造成時の花崗土③近現代の耕作土④近世の耕作土⑤中世後半～近世初頭頃の耕作土⑥遺構面⑦ベース層の計7層に分かれる。

今回の調査では、調査区を6区に分けて設定し、中世の集落跡と近世の出水を検出した。

1. 中世

柱穴跡、土坑跡、楕円形土坑跡などが確認された。柱穴跡は1・2区で多く確認されており、遺跡西部に集落の中心域があったと想定できる。しかし、調査区が狭かったこともあり、掘立柱建物跡の検出には至らなかった。柱穴跡から、土師質土器足釜の脚部などが出土しており、13世紀後半以降のものと考えられる。

楕円形土坑跡は3区で確認し、規模は長軸3.5 m、短軸1.2 m、深さ12 cmである。埋土は1層でベース層を掘り込んで造られている。埋土には炭化物が含まれ、とくに中央部に集中して含有されていた。掘削を進めると、焼土が現れ、ベース層上面には被熱痕が残っていた。これらから、この遺構は焼成遺構と考えられるが、焼成室以外が削平されているため、具体的な構造は不明である。ただし、焼土や被熱痕をみると、低火度焼成であったと想定され、炭窯や土師質土器焼成遺構などのようなものであった可能性が考えられる。埋土中より、土師質土器足釜の口縁部が出土しており、13世紀後半から14世紀代の年代が与えられる。

2. 近世

出水などを確認した。4区で検出した出水は円形の平面プランを有し、直径約5m、深さ約3mの規模を誇る。壁面は人頭大の安山岩による石積み、底面には小礫が敷き詰められていた。掘削中も湧水が多く噴き出していたが、これは周囲の五色台系山地の水分が、遺跡周辺の谷底低地で伏流水として集められたためであり、出水はこれを狙って掘られたと考えられる。降雨量が少なく、水不足に陥りやすい讃岐では、河川や溜池と出水を組み合わせることで、灌漑用水として利用しており、この出水も灌漑用水として用いられたと想定される。また、出水内部に「L」字形の石組みが組み立てられており、補修を施しながら利用され続けたことが分かる。その後、出水は埋め戻され、これを横切るような形で石組み溝が設けられている。

出水からは陶磁器類や瓦、土師質土器などが出土しており、江戸時代後期にあたる18世紀後半から明治時代にかけてのものである。つまり、この出水は18世紀後半に築造され、明治時代に廃絶したものと考えられる。出水が明治時代に廃絶した背景には、溜池の増設などによる灌漑用水路網の再編を想定することができ、あくまで補助的な水源にすぎない出水は役割を終えたと考えられる。出水廃絶後に設けられた石組み溝は、その後、昭和50年代の県道建設直前まで使用されていたようである。

3. まとめ

以上、青海中村遺跡の調査成果について概観してきた。結果として、遺跡の西側に13世紀後半から14世紀代にかけての集落跡が広がることと、江戸時代後半から明治時代にかけての出水を確認した。

青海中村遺跡や青海神社下遺跡で検出された中世集落はいずれも谷底低地上に立地している。しかし、青海町内に現在広がっている集落は丘陵上に営まれており、立地的には隔絶した在り方を示



写真27 1区完掘(北西から)



写真28 3区楕円形土坑完掘(南東から)



写真29 4区出水施設(南から)